



ジュディスの中のアリスとロリータ ——ウォートンの『子供たち』における少女像⁽¹⁾——

吉 野 成 美

要旨 ウォートンの作品『子供たち』(1928)に登場するヒロイン、ジュディスは、ナボコフの『ロリータ』(1955)に先駆けて、自身の親と同年齢の中年男性マーティンが恋に落ちる「ニンフェット」として描かれている。本稿ではウォートン自身も幼少時に愛読した『不思議の国のアリス』に描かれた少女の19世紀的アセクシュアルな少女像のイメージを彼女自身の幼少期の回顧録と照らし合わせて考察しながら、彼女が既存の19世紀的少女像アリスから逸脱し、20世紀的少女像のロリータのようなヒロインをジュディスに描いた点について、ジュディスにとってロリータの「ハンパート」となるマーティンとの関係を主軸に据えて論じている。

キーワード ウォートン、『子供たち』、少女像、アリス、ロリータ

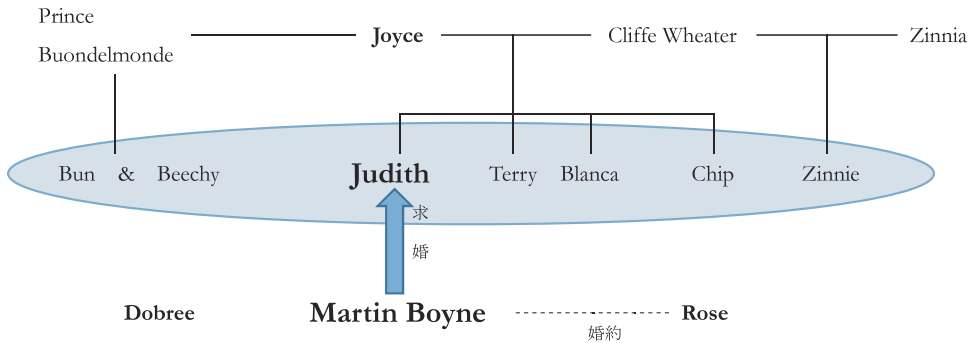
原稿受理日 2018年9月26日

Abstract This paper discusses how Edith Wharton created her image of a “little girl” in the figure of the heroine, Judith Wheeler, a 15-year-old teenager, whose half-child and half-adult behaviors have often drawn critics' attention to the protagonist Martin Boyne's almost pedophilic attachment to her. In the paper, Lewis Carroll's Alice from the 19th century, and Vladimir Nabokov's Lolita from the 20th century, the two most typical girl figures in literature, are respectively compared to Judith as well as Edith's youth. I will then examine how similar or different Wharton's descriptions of Judith could be to them.

Key words Wharton, *The Children*, girls, Alice, Lolita

(1) 本稿は、第89回日本英文学会(2017年5月20日於静岡大学)での口頭発表を大幅に加筆・修正したものである。また、科研費(研究課題番号:16K02519)の助成を受けていることを明記しておく。基盤研究(C)、課題名「イーディス・ウォートンの小説におけるイメージとしての少女」。

1928年に発表されたイーディス・ウォートンの小説『子供たち』は、ジャズ・エイジの狂乱のさなか、ヨーロッパで遊興にふけるウィーター夫妻の結婚、離婚、再婚で異父・異母兄弟を含めて7人に膨れ上がった「子供たち」が、身勝手な両親から逃れて結束し、にわか保護者となってくれた46歳の中年男性と共に過ごす、夏から晩秋にかけての物語である。（その複雑な家族間の人間関係相関図に関しては図1を参照。）



【図1：人物関係相関図】

「子供たち」を中心に展開する物語であるとはいえ、この作品の主人公はウィーター夫妻の学生時代の知り合いで、子供たちとはヨーロッパ行きの船の中で偶然知り合い、その後彼らの保護者となるマーティン・ボインであり、彼が子供たちの一人、年長者で15歳のジュディスに対して図らずも抱いてしまった恋愛感情をめぐる精神的苦悩と、それが及ぼす周囲への影響が、この小説の中核である。

この風変わりな設定の物語において、特にマーティンとジュディスの年齢差のある恋愛関係について考察している先行研究をいくつか挙げてみると、例えば、ホーナーとビアーは、年上の男性が若い少女に対して抱く欲望をタブーとしない当時の矛盾した価値観を批判している、と述べている。

This is not a novel about the deleterious effects of divorce on children, as most reviewers have assumed. Its focus is much broader, as it critiques the incoherent values of a decade that does not see the desire of an older man for a young girl as a taboo. (Horner and Beer 60)

別の批評家キローランは、マーティンは子供の基本的なニーズを理解しておらず、彼とジュディスの関係は、ナボコフの小説におけるハンバートとロリータを予示するものであると主張する。

...he [Martin] has no sense of the most basic needs of children. (Killoran 125)

The children's danger is not from incest but from a different sexual perversion, pedophilia. . . Boyne is transformed from a mere busybody. . . to a pedophile. In forty-six-year-old Martin Boyne Wharton anticipates Humbert Humbert. Fifteen-year-old Judith prefigures Lolita, a rebellious adolescent and seductive nymphet. (Killoran 126)

また別の批評家は、次のように、ジュディスはロリータではないが、マーティンはハンバートと類似していると述べている。

Judith is no Lolita (though Martin's desire for her intriguingly anticipates Humbert Humbert's mournful nympholepsy). The playful, trusting relationship between Martin and Judith is not an erotic exchange. . . (Lee 659)

ナボコフの『ロリータ』に先んずること30年あまり、15歳の少女に惹かれる46歳の中年男性が主人公という設定は、ウォートン作品の中ではかなりユニークなテーマを扱っているといえるだろう。ウォートン作品において、恋愛や婚姻関係をもつ男女の年齢差が父と娘ほどに開いている主要な作品を挙げると『夏』を筆頭に、『母の償い』、『トワイライト・スリープ』と存在し、これらの小説で描かれる男女関係は、擬似的インセストとしての解釈が可能である。「擬似的」であるというのは、ウォートン作品におけるこのテーマは、多くの場合、血縁関係者同士の性的交配という字義通りの直接的近親相姦を扱っているわけではなく、あくまでも義理や社会的ステータス上の父娘関係にある男女間をめぐる、比喩的な意味合いが強いことを指している。とはいえ、インセストは「タブー」であるがゆえに、ウォートン作品における擬似的インセストの関係は、当事者の苦悩、あるいは周囲の困惑が物語の中核をなすための舞台装置として位置づけられるため、多様な解釈を可能にしてきたともいえる。

小説『子供たち』の場合も、マーティンはジュディスの保護者をつとめているために、二人は擬似的な父娘の関係であると言えなくはない。ただ、二人の力関係を考えると、

マーティンは天真爛漫で捉えどころのないジュディスを「父」として支配することは叶わない。そして、この捉えどころのない少女として描かれるジュディスのヒロイン像に関して、本発表ではこの作品に、インセストというよりはペドフィリア、または少女偏愛を見出すことで、ジュディスの少女像が、19世紀の欧米社会においていわゆる「少女」のイメージを確立することに寄与した『不思議の国のアリス』の主人公がもつ愛らしくもアセクシュアルな「少女」のイメージから逸脱し、退廃的でセクシュアルな「ロリータ」のイメージをある程度までは先取りしていたことを明らかにしようとするものである。

ここで「ある程度までは」と条件を付けている点に関して、説明が必要であろう。『子供たち』は確かに中年男性とティーンエイジャー少女のロマンスを扱っているという点においてロリータとの類似は間違いないが、それぞれの小説における主人公の中年男性には、その意識に大きな差があることを見過ごすことはできない。ナボコフの小説『ロリータ』では、語り手ハンバートは初めから少女ロリータへの性的関心を露わにし、その母親シャーロットと結婚することで娘ロリータに近づき、シャーロットの死後は、義父という立場を利用してロリータと懇ろな関係になり、と、いわば確信犯的にロリータを手中に収めている。それに比べ、『子供たち』のマーティンは、ジュディスを愛するがゆえに苦悩する、ある意味善良な人間として描かれている。どちらかという、以下にマクダウェルも主張するように、失敗ばかりが強調されるコミカルな人間らしい人間として描かれているのである。

The humor inherent in Martin Boyne succeeds partly because Wharton liked him so much and was indulgent with him and partly because she caught a genuine comic type in him. The comedy in which he figures is sparked by his blunders, near-misses, mishaps, and discomfitures—all the result of good intentions that go wrong and leave him baffled. (McDowell 110-111)

本論では、従来の批評家が主張してきた、少女ジュディスに対して成人男性マーティンが抱く性的思慕を批判するではなく、むしろ、マーティンの苦悩によって結果的に高められているジュディスの少女としてのプレミアム的な側面を追求することで、彼女が体現する「少女」像がアリスとロリータという二つの対極的イメージを内包していることを考察していく。

具体的なプロセスとして、本論ではまず、いわゆるアセクシュアルな「少女」のイメージについて、19世紀の児童書『不思議の国のアリス』で描かれる「アリス」とウォートン

の幼少期の関係について考察し、その後、アリスの少女のイメージが『子供たち』のヒロイン、ジュディスにどこまで投影されているかを検討する。そして、ジュディスが純真無垢な少女としてのアリスの側面を保ちつつも、一方で、キローランの指摘するロリータのようなセクシュアルな側面も併せ持っていることに関して、その原因をジュディス本人ではなく、彼女とマーティンを取りまく大人の世界に探っていく。

1. アリス＝イーディス

ウォートンが晩年発表した自伝『振り返りて』の冒頭の部分は、彼女が初めて物心ついたときの様子が語られている。

It was on a bright day of midwinter, in New York. The little girl who eventually became me, but as yet was neither me nor anybody else in particular, but merely a soft anonymous morsel of humanity — this little girl, who bore my name, was going for a walk with her father. . . . One of them [her hands] lay in the large safe hollow of her father's bare hand; her tall handsome father, who was so warm-blooded that in the coldest weather he always went out without gloves, and whose head, with its ruddy complexion and intensely blue eyes, was so far aloft that when she walked beside him she was too near to see his face. It was always an event in the little girl's life to take a walk with her father, and more particularly so today, because she had on her new winter bonnet, which was so beautiful (and so becoming) that for the first time she woke to the importance of dress, and of herself as a subject for adornment — so that I may date from that hour the birth of the conscious and feminine ME in the little girl's vague soul. (*A Backward Glance* 1-2 下線は筆者によるもの)

「小さな女の子, little girl」と何度も繰り返し定義されている小さなイーディスが、新調したての帽子と素敵なお洋服を身に付け、温かい手で導いてくれる父親とともにあるという状況は、幼少期の自身のイメージをウォートン自らがこのように描写した、という意味で大変示唆的である。「小さな女の子, little girl」は父親の大切な宝物、プレミアム商品であり、服で着飾られた美しい女性のミニチュアとして存在する。そこに「女性としての私, feminine me」が初めて宿ったとさえいうウォートンの口調はどちらかといえば誇らしげで、実の父親とはいえ成人男性の所有物となっている「女性」に対する非難や悲観は

まったく感じられない。

父親の温かい手の中で安全地帯にいる the little girl イーディスは、その後アメリカを離れ、ヨーロッパの国々を転々として過ごすことになるが、行く先々で習得した外国語を話しながら異国の文化に触れる彼女は、ある意味、異国という名の「おとぎ話」の暮らしを経験していたといったら良いのではないだろうか。

...the things about me were now not ugly but incredibly beautiful. That old Rome of the mid-nineteenth century was still the city of romantic ruins... (*A Backward Glance* 29)

4 歳になったイーディスがヨーロッパで暮らし始めた1866年は、『不思議の国のアリス』が刊行された翌年のことだった。彼女が実際にアリスを知ったのが正確にはいつなのかははっきりしないが、少なくとも、イーディスがヨーロッパから帰国してアメリカで暮らし始めたときまでに、彼女の家では年の離れた兄たちも含めて、この本が愛読されていたようである。

We all knew by heart “Alice in Wonderland,” “The Hunting of the Snark,” and whole pages of Lear’s “Nonsense Book,” and our sensitiveness to the quality of the English we spoke doubled our enjoyment of the incredible verbal gymnastics of those immortal works. (*A Backward Glance* 50)

19世紀後半、爆発的な人気を誇ったルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』は、児童文学のありようを、それまでの教訓本から解放し、子供向けの純粋な娯楽本としての可能性を開いたことで有名である。特に、パンチ紙のイラストを手掛けていたジョン・テニエルの描くその挿絵の絶大な効果もあって、アリスはそのイメージを人々に定着させるだけの影響力のある女性キャラクターとなり、視覚的効果でもって、愛される少女像とはどのようなものなのか、具体的に人々にさし示すことができた。

当時、テニエルの挿絵を、物語の内容と一緒に楽しんでいたはずのイーディスの目に、このイラストで描かれるアリスのイメージはどのように映っていたのだろうか。図2は8歳のときのイーディスの肖像画であるが、これを『不思議の国のアリス』内に描かれているアリスのイラストのいくつか(図3と4)と並置してみる。イラストのアリスは愛くるしくもきりっとした顔立ちをしている。笑顔を見せることはなく、立ち向かっていく相手



【図 2】



【図 3】



【図 4】

に対しては常にシリアスな顔つきをしているためか、やや勝ち気で頑固そうな女の子に見える。

...I wonder what Latitude and Longitude I've got to? (Alice had not the slightest idea what Latitude was, or Longitude either, but she thought they were nice grand words to say.) (Carroll 8)

Alice...felt very glad to get an opportunity of showing off a little of her knowledge. "Just think what work it would make with the day and night! You see the earth takes twenty-four hours to turn round on its axis—" (Carroll 44)

上記引用のように、アリスの自分の知性をアピールしようとする姿勢には、「学校のお勉強」がよくできる、優等生タイプのキャラクターを見ることができるが、イラストでも、オールバックのヘアスタイルでいかにもかしこそうな広い額が強調されている。そしてこのアリスと彼女のイラストを楽しんだ当時のイーディスを視覚的に比べてみれば、目元の鋭さはアリスほどではないにしろ、イーディスの、額を見せるヘアスタイルと思慮深そうな眼差し、そしてフリルがついて膨らんだスカートのギャザーがいかにも「少女」らしさを醸しだし、アリスのそれと酷似しているといえるだろう。

もっとも、貴族女性のミニチュア版のような姿で登場する『振り返りて』冒頭の少女イーディスの描写や、この肖像画には、いわゆる「子供」らしさが欠けているといえるかもしれないが、一方で、テニエルが描くイラスト上のアリスもまた、ルイス・キャロルが

モデルにした実在の少女アリス・リデルとはかけ離れたイメージで描かれたとされる。

A childless widower, Tenniel had had little experience of drawing children, and his Alice often looks more like a miniaturized adult than a real child. (Clark 105)

アリスが「子供というよりはむしろ大人のミニチュア版」としての印象を与えるのは、物語内でのアリスのおかれた孤独な状況にも原因があるかもしれない。年上の姉が遊び相手になってくれなくて退屈しているアリスは、ペットの猫ダイナを大切にしている。そしてこの状況は、イーディスが年の離れた兄二人とは一緒に遊べず、一人、物語を書くことに没頭する日々を送っていたこと、また、兄弟姉妹のかわりにぬくもりを与えてくれる大切な仲間として、ペットの犬フォクシーをかわいがっていた事実と重なるところでもある。一人ぼっちのアリスは穴から落ちてたどり着く異次元の世界で、小さくなったり大きくなったりしながら、言葉話す人間ではないものたちと出会い、非現実的な環境の中で多くの冒険をする。同じく独りぼっちのイーディスは、故郷のアメリカを離れ、イタリア、フランス、イギリス、スペインと、ヨーロッパという異次元世界で多くのものを見聞きした。「子供」でありながら「大人」のように、周囲の様子を観察しながら、大人のように振る舞うイーディスは、その時々に応じて、アリス同様、大きくなったり小さくなったりしながら異国での暮らしを営んでいたのである。

子供向けの本には興味を示さなかったと強調するイーディスは、それでも、『不思議の国のアリス』は好意的に受け止めていた。知性とウィットを尊び、上質のユーモアを味わうことができるという点で、『不思議の国のアリス』は子供向けの本でありながらもウォートンの中では別格であったと考えて良いかもしれない。ルイス・キャロルのウィットに富んだ言葉をふんだんに浴びながら、テニエルの視覚に訴えるイラストに描かれた少女像の子供でありながら大人びた様相を目の当たりにしたことが、ウォートン自身が後になって振り返る理想化された自身の「少女」像の形成に、大なり小なりの影響を与えたといえるのではないだろうか。

とはいうものの、自身が書き手にまわったとき、ウォートンが描いたのは、不思議な国で(楽しい)冒険に興じ続けるおとぎ話の国に住む少女アリスではなかった。おとぎ話という性質上、将来のことを考えて計画的に行動する必要がないアリスが、ただ目の前にある障害をクリアするためだけにその全思考を使うことができる「永遠の少女」でいられるのに対し、ウォートンの描くリアリズム世界では、少女のヒロインたちが目の前にある障害

を次々にクリアして行きつく先は、自分たちの「少女」の身分を剥奪する「結婚」というゴールである。ウォートン作品ではこの「結婚」が物語の中核に据えられていることがほとんどであるために、アリスのような永遠の少女としてのヒロインは、ウォートンには無関係な存在だったとしてもそれは当然である。

このような状況において、小説『子供たち』におけるジュディス・ウィーターは、ウォートンが描くヒロイン像の中では珍しい存在であるといえるだろう。結婚適齢期を目前に控えた15歳という年齢にもかかわらず、ジュディスは物語を通して「結婚」の目的のために行動することは一切なく、自分を含めた七人の子供たちの結束のために迫りくる障害物をはねのけて前進することにのみ生きがいを見出す、純粋な少女として描かれているのである。ジュディスはウォートンが自身の幼少時代をある程度重ね合わせて生まれたヒロインであると考えることができる。

2. ジュディス＝イーディス＝アリス

小説『子供たち』の舞台は、ウォートン自身が幼少期に旅行したヨーロッパの中のイタリアであり、登場人物たちのほとんどは、ホテルを転々としながら暮らす。つまり、幼少期、イーディスが滞在したヨーロッパという「不思議な国」における経験は、そのままウィーター家の子供たちが体験することと同じでもある。その意味において、ジュディスはイーディスであり、アリスであるといえる。

しかしながら、ジュディスがアリスと似ているのは、穴に落ちて冒険するという物語の形式的な部分の比喩的な意味合いだけではなく、むしろ、物語上でアリスが位置している、少女としての「安全な領域」という立場において、といえるだろう。アリスは、親の庇護から離れ、チョッキを着たウサギを追いかけて異次元空間に飛び込み、見知らぬものたちと次々に出会い、時として危険な冒険をも体験するが、最終的に、身体的にも精神的にも傷を負うことがない。

アリスにとって旅の終わりは彼女の「目覚め」によって実現し、彼女は最後に母の待っているであろう自宅に、お茶の時間を過ごしに戻っていく。

“Wake up, Alice, dear !” said her sister. “Why, what a long sleep you’ve had !”

“Oh, I’ve had such a curious dream !” said Alice. . . . her sister kissed her, and said

“It *was* a curious dream, dear, certainly; but now run in to your tea: it’s getting late.”

So Alice got up and ran off, thinking while she ran, as well she might what a wonderful

dream it had been. (Carroll 96)

対するジュディスもまた、6人の弟妹と雇われ乳母を引き連れているという点ではアリスの状況とは異なっているが、両親の庇護から離脱し、船の上で知り合った見ず知らずの中年男性マーティンを追いかけてイタリア北部のドロミテの地にやってくる。そして、マーティンを始め、彼の婚約者ローズや、弁護士のドブリー氏、ブオンデルモンテ侯爵夫人など、見知らぬ大人たちとの、決して楽しいとは言えないが不思議な交流を体験する。

アリスが安全でいられるのは、彼女のサイズが向き合う相手よりも時として物理的に大きくなることができ、ゆえに、打ち負かされる危険がないからである。「子供」でいながらも大人のサイズになることで危険が回避できる。だから、アリスが経験するのはその身の存続を危ぶまれるような深刻で恐ろしい「危険」ではなく、リスクではあってもスリルに満ちた「驚くべき」冒険でありうる。このように、アリスが作中で大きくなったり小さくなったりを繰り返すのと同様に、ジュディスもまた、その時々状況に応じて子供になったり大人になったりと、変化する存在として描かれている。例えば、妹ジニーの母親で女優のジニアが現れると、ジュディスは突然大きくなり、子供たちの結束を乱すジニアに対して強い態度に出るが、ジニアが去ると、ふくれっ面をした子供の顔に戻っている。

She [Zinnia] cast an ingratiating glance at Judith, but the latter, quietly facing her, seemed to Boyne to have grown suddenly tall and authoritative, as she did when she had to cope with a nursery munity. (62)

Her features, so tense and grown-up looking during the film star's visit, had melted into the small round face of a pouting child." (71)

事実、ジュディスが子供になったり大人になったりする様子を、批評家のリーは、「カメレオン」のようであると表現している。

...Judith is another matter, an ardent chameleon-like creature, half-girl and half-woman... (Lee 657)

必要に応じて大きくなり、自分たちの安寧を脅かす大人たちと対等に渡り合えるジュディスは、決してマーティンやドブリー氏の実質的な性的搾取に遭うことはなく、ローズや伯

爵夫人にはいかがわしい眼差しで眺められこそすれ、そのことをジュディス自身はまったく気づかないままに、無傷の状態で最終的には母親のいるパリへと戻っていく。小説『子供たち』は、仮にジュディスの立場から見た物語として読んだ場合、アリス同様、無邪気な少女の冒険小説として読める一面を併せ持っているといえるだろう。

小説『子供たち』におけるジュディスと、彼女が置かれた物語上の設定はまた、もう一人のアリス、すなわち、『不思議の国のアリス』の实在モデルであった少女アリス・リデルの状況を思い起こさせる。一般的にもよく知られていることであるが、『不思議の国のアリス』は数学者チャールズ・ドッドソンが懇意にしていたリデル家の姉妹たちとピクニックに行った際に、三女のアリスを主人公にした物語を語って聞かせたものがベースになって誕生した。引用に示している通り、リデル姉妹との親交を深めていたドッドソンは子供を楽しませることが大変上手であったとされ、アリス・リデル自身も晩年、ドッドソンがたくさんの食べ物を用意し、ボートでの川下りとピクニックを企画したことを振り返っている。

By the time he turned 30, he had established the first of his great friendships with children. Dodgson and the young Liddells called constantly on each other. From this point forward, being a friend, photographer, and entertainer of girls and boy was his favorite recreation and a most seriously held responsibility. (Stoffel 57)

Alice recalled in a 1932 interview that “when we went on the river. . .with Mr. Dodgson . . .he always brought out with him a large basket full of cakes, and a kettle. . . On rarer occasions we went out for the whole day with him, and then we took a larger basket with luncheon-cold chicken and salad and all sorts of good things. One of our favorite whole-day excursions was to row down to Nuneham and picnic in the woods there. (Stoffel 61-2)

ジュディスやその他ウィーター家の子供たちにとって、マーティンはまさにリデル姉妹にとってのドッドソンのような存在であろう。ポケットにお土産をしのばせて子供たちを訪問するマーティンを子供たちは歓待する。また、ドッドソンが企画したように、マーティンもまた、子どもたちのためにピクニックを企画し、あちらこちらへと出かけて行く。ヒロインを見つめる男性がそばにいるという意味において、ジュディスは、『不思議の国のアリス』よりはむしろ、そのモデルであるアリス・リデルと類似しているといってもよ

いかもしれない。

3. ジュディス＝ファム・ファタール

先にも述べた通り、ジュディスは、アリスのようなアセクシュアルな「少女」の側面もあるとはいえ、もう一方で、彼女はまた、マーティンを誘惑するセクシュアルなファム・ファタールとしてのロリータを連想させているのも事実である。それでは、実質的に「アリス」であるはずのジュディスがどうやって「ロリータ」となりうるのだろうか。ここでは、彼女が「子供」であるという前提に潜む落とし穴と、ジュディスをライバル視するローズの、大人としての視点について検証していく。

まず、作品内において、ジュディスや彼女の弟妹は法的・社会的に、成人の庇護が必要な「子供」という設定におかれていることを読者は認識しておく必要がある。子供であるからこそ、マーティンにとっては恋愛や結婚の対象外のはずであり、だからこそ、マーティンは彼らと「お近づき」になれた。ジュディスは「子供たち」の集団に入っている限り「子供」であり、それは「聖域」であって、いかなる男性をも寄せ付けないはずであるという前提にある。

マーティン自身が、子供だから恋愛対象外、という前提で付き合い合っていたジュディスは、しかしながら、彼女が子供だからこそ、その無邪気で無防備な態度でもって、マーティンを結果的に誘惑し翻弄する存在となってしまう。特にその、「子供」だからこそ行う、計算しない、遠慮のない身体的接触は注目に値するだろう。例えば、マーティンがウィーター夫妻相手に子供たちのために戦ってあげよう、とジュディスに伝えると、彼女は、感動して思わずマーティンに抱きついていく。

In an instant her arms were about his neck, her wet face pressed against his lips. (“Now...now...now...” he grumbled.) (128)

マーティンへの身体的接触は、ジュディスよりさらに幼い妹たちによっても繰り返されており、ジュディスのそれと妹たちのそれはマーティンの中で混然一体となる。例えば次の引用では最初に妹たちの身体的接触が描かれた後、今度はジュディスが腕を絡ませて二人きりの散歩に出かけるが、彼女の若い体の接近は彼にとって翼のようだったと記されている。

...from Blanca's cool kiss to the damp and strangulating endearments of Beechy. To Boyne it was literally like a dip into a quick sea, with waves that burnt his eyes, choked his throat and ears, but stung him, body and brain, to fresh activity. "And now let's kiss him all over again-and it's my turn first!" Zinnie rapturously proposed; (158)

Judith, unasked, had slipped her arm through Boyne's, and the nearness of her light young body was like wings to him. (159)

子供じみた計算のない身体的接触は、間違いなくマーティンのジュディスへの思慕を高めることに貢献している。ジュディスと別れて3年後、偶然、子供たちが滞在するホテルでジュディスの妹ジニーに出会ったマーティンは、彼女が細い腕を自分に絡ませてくるとき、ジュディスを思い出して切ない気持ちを抱く。

"I don't believe you'd have known me if I hadn't spoken to you, world you?"

"Not if you hadn't had that burning bush," he said, touching her hair. His voice was trembling; he could hardly see her for the blur in his eyes. If he closed his lids he might almost imagine that the thin arm about his neck was Judith's...

子供だからこそ行う、計算のないベタベタした関係は、果たしてどこまでが純粋な子供との身体的接触で、どこまでが性的なものなのか、あるいはそれらは不可分なものなのか、もはやはっきりしない。それでも、マーティンが子供たちとだけの世界にどっぷりとつかっている限りにおいて、マーティンとジュディスの関係はどこまでも兄と妹の関係であり、実際、次に示す引用でも、マーティンのジュディスに対する思慕は「brotherly」という言葉で表現されている。ただし、この brotherly と解釈される感情は、あくまでもマーティンが他の大人との接触を断っているときに限られていることに留意しておく必要がある。

Boyne, once more alone with the children, found that his confused feeling about Judith had given way to the frank elder-brotherly affection he had felt for her on the cruise. Perhaps because she herself had become natural and simple, now that there were no older people to put her on the defensive, she seemed again the buoyant child who had first captivated him. Or perhaps his thinking so was just a part of his satisfaction at being with

his flock again, unobserved and uncriticised by the grown up. He and they understood each other. . . . (214)

そして、マーティンのジュディスへの思慕にセクシュアルな意味を読みこむのは彼自身ではなく、彼の周囲の大人たち、とくに彼のフィアンセ、ローズである。例えば、マーティンがジュディスについて、「まったく美人ではない」(39)と、手紙でローズに説明すると、彼女は「もちろんこの子は美人でしょうよ。そうでなければあなたが彼女は美人でないことをそれほど苦心して説明しないはずですよ」(40)と鋭く返答してくる。ローズは早い段階でマーティン自身が気づいていなかったかもしれないジュディスへの異性愛を言語化して彼に知らせているのである。

マーティンのジュディスに対する思いが彼自身の中でも初めてセクシュアルなものになるのは、ドブリー氏、ローズ、と共に七人の子供たちを連れてピクニックに行ったときである。原っぱに横たわって眠っているジュディスを見て、マーティンはジュディスが急に大人になったと思う。

She looks almost grown up—she looks kissable. Why should she, all of a sudden? (179)

子どもだと思っているジュディスが成人女性の美しさでマーティンを誘惑するまさにそのとき、本来ならば自分がそばにいるはずのローズのとなりでジュディスを見つめるドブリー氏の視線に、マーティンは自身のそれと同じものを見いだしている。

His [Dobree's] clear cautious eyes had grown blurred and furtive; one could almost see a faint line stretching from them to the recumbent Judith. Along that line it was manifest that Mr. Dobree's thoughts were racing; and Boyne knew they were the same thoughts as his own. (179)

そして、このときの出来事もまた、ローズによって言語化され、それはマーティンにとって自身が実は最も否定しがっていたペドフィリアの要素を自他ともに認めてしまう瞬間となる。「あなたはジュディス・ウィーターに恋をしている。ドブリー氏はそう確信しているわ」(191)。それに続く文章では、ジュディスが child であること、そして、そんな child を恋愛対象として見ていると他人に指摘することで、ドブリー氏がどういいういやらしい考えの持ち主なのかわかる、と非難しながらも、その言葉がそっくりそのまま自分自身に戻ってきていることをマーティン本人が自覚することにより絶望感を覚える様子が描

かれる。

“Rotten. The mere thinking of such a thing—much less insinuating it to any one else. But it just shows —” He broke off, and then began again, on a fresh wave of indignation: “Shows what kind of a mind he must have. Thinking in that way about a child—a mere child—and about any man, any *decent* man; regarding it as possible, perhaps as natural. . .worst of all, suggesting it of someone standing in my position toward these children; as if I might take advantage of my opportunities to—to fall in love with a child in the schoolroom !”

Boyne's words sounded in his own ears as if they were being megaphoned at him across the width of the room. (191)

ローズはまた別の機会に、再度、マーティンに対して彼の気持ちを大人の視点から言語化して知らせる。

“...when I ask you to choose between me and the Wheeler children, you choose the Wheeler children—out of philanthropy?”

“I didn't say out of philanthropy. I said I didn't know...”

“If you don't know, I do. You're in love with Judith Wheeler, and you're trying to persuade yourself that you're still in love with me.” (203)

中年男性マーティンの少女ジュディスに対する思慕はこうして、ローズが体现する大人の言葉と文脈によって言語化・分類化され、マーティンの意識の中にエロスを伴う性的な意味合いの強い恋愛感情として浸透していく。マーティンにとって I didn't know, わからないもの、すなわち言語化できない感情が、ジュディスへの思慕であるとするならば、そこに大人の視点から言語化して彼に提示するのはローズの役割である。そして、ローズとの婚約解消後、マーティンはジュディスへの思慕に関して、それが恋愛の感情であってもなくても、もはや弁明することはない。ローズによって言語化され分類化されたマーティンの思いは、彼自身の中でまぎれもない恋愛の感情として再定義される。中年男性マーティンの少女ジュディスに対する思慕はこうして、大人の言葉と文脈によって、エロスを伴う性的な意味合いの強い恋愛感情、つまり、ハンバートがロリータに抱く感情を思い起こさせるものになる。ローズの言語化によってマーティンの恋愛感情はローズからの指摘を受けて以降、マーティンはジュディスに対しての目にうつるジュディスはあからさまにその

セクシュアリティを開花させている。

...and suddenly he put his arm about her and bent his head to her lips. They looked round and glowing, as they did in laughter or emotion; they drew his irresistibly. (233)

“My darling, my darling.” She leaned close as she said it, and he cared not move, in his new awe of her nearness—so subtly had she changed from the child of his familiar endearments to the woman he passionately longed for. . . . (267)

マーティンはそれでもハンバートにはなれない。そしてその理由は主に二つ存在するだろう。理由の一つ目。少女ロリータを手中に収めるためにハンバートがその母をまず攻略し、手なずけることに成功したのに対し、マーティンはジュディスの母ジョイスを最終的に手中に収めることができなかった。もっとも、物語の前半、マーティンはジョイスを「手なずける」ことに部分的に成功していたといって良かった。ジョイスは大学時代、マーティンと付き合っていた過去があり、子供たちのためにわか保護者となることも承認していたからである。だが、その保護者としての役割は、その年の夏から秋にかけての一時的な期間においてのみその機能を果たしたにすぎず、最終的にはウィーター夫妻の再度の離婚が決定的となった秋、子供たちはマーティンの手を離れ、パリにいる母親のもとへと向かう。そしてそこでは、かつてローズの弁護士として辣腕をふるったドブリー氏が、今度はジョイスの弁護士として、子供たちの親権をジョイスが獲得できるように働くことになっていた。この時点で、ジュディスにとって、ドブリー氏はマーティンの代替物として十分に機能を果たしていることが彼女の次のセリフからも明らかである。

...I do like you heaps better, Martin. But he [Mr. Dobree]’s been most awfully good about the children, and he can make mother do whatever he tells her. And she says he’s a great lawyer, and his clients almost always win their cases. Oh, Martin, wouldn’t it be heavenly if he could really keep us together, steps and all? He’s sworn to me that he will.” (285)

批評家たちはドブリー氏をローズと並んで規律の権化として定義するが、実際のところ、ドブリー氏はマーティン同様、ジュディスに対してエロスを感じる成人男性であり、その意味においてドブリー氏はマーティンのダブルである。ただし、ドブリー氏はマーティンをずっと上回る策略家であるという点において二人の差は歴然としている。彼は弁護士と

しての手腕でもって子供たちの親権をジョイスのために勝ち取っただけではなく、最終的にジョイスと結婚することで、法の下に堂々と子供たちの保護者となる。彼はもちろんマーティンほどにジュディスを欲しているわけではなかったかもしれないが、少なくとも、マーティンが求めていたことをすべて、やすやすと成し遂げている。その意味において、ハンバートの役目は物語の最後でマーティンからドブリー氏へと移ってしまったといえるだろう。

ハンバートやドブリー氏の例からも明らかなように、仮に中年男性が少女を手中に収めたいのであれば、その母親を手なずけなくてはならない。『不思議の国のアリス』のモデル、アリス・リデルもまた、アリスの本が出版された後、その母親が娘とドッドソンが親しくすることを快く思わず、関係は途絶えたことをここに指摘しておく必要があるだろう。...he was no longer a welcome visitor where Alice's mother was concerned and he may have felt it wiser to stay away. (Clark 112)

マーティンがハンバートになりきれなかったもう一つの理由は、マーティン自身にとって、結局、ジュディスが最後まで、触れてはならない少女であり続けたことだといえるだろう。ジュディスの少女としてのイメージは、マーティンが自身を小児愛者であると自覚することによってはじめて、逆説的にもアセクシュアルなアリスからセクシュアルなロリータへと変貌を遂げることになる。ジュディスを恋愛の対象として見てはいけないと誰よりも強く思っていたのはマーティン本人であった。だからこそ、彼は彼女に対する抑えきれない思慕に苦悩することになっていたのである。前述の引用部分でジュディスの唇に誘惑されるマーティンは、それでも彼女の唇を奪うことはない。

But he turned his head aside, and his kiss fell harmlessly on her cheek, near the tear-hung lashes.... He...took her by the arm in the old brotherly way. (233)

ジュディスを欲するマーティンが、彼女の唇を奪おうとするその瞬間、これ以上近距離になることを阻止されるかのように、見えない境界線が二人の間にしかれているのを読者はテキスト内に見て取ることができる。マーティンの唇は彼女の頬にとどまり、彼は「兄のように」彼女の腕をとっている。

触れてはならない少女としてのジュディスは、それから三年後、18歳になっても、マーティンにとって触れることが叶わない存在である。

... he mechanically turned back to the window. And there she was, close to him on the other side of the pane. . . . She was facing Boyne now—she was joining a group near his window. . . . Boyne, from without, continued to gaze at her. (298)

ガラス窓の向こうにいるジュディスは、マーティンの側からのみ目にすることはできても触れることはかなわず、また、彼女がこちらを気づくこともない。マーティンにとって、ジュディスはイーディスによって設けられたガラスの向こうのロリータであり、ガラスの向こうにいる限り、ロリータはどこまでもアリスである。

最後にもう一度イーディスが愛読した『不思議の国のアリス』から次の引用について言及しておかなくてはならない。

“I—I’m a little girl,” said Alice, rather doubtfully, as she remembered the number of changes she had gone through, that day. (Carroll 42 下線は筆者によるもの)

図5のイラストで示されているように、不思議の国で首がのびて大きくなってしまったアリスは、それでも、「私は小さな女の子よ」と自らを定義する。背の高い little Girl, 大きくても little Girl。このセリフは、ある意味示唆に富んだものであるといえる。ヴィクトリア朝小説における子供とペドフィリアについての研究書を著したキンケイドは次のように言っている。



【図5】

... Alice plays brilliantly her false-child role, never is a true child, never responds to Carroll himself when he enters as the true child, as the Dodo, gnat, or White Knight. We do, thus, get a strong sense of a true child in these books, one who is central to the nonsense, who not only does not want to grow up but has no way of imagining such a thing. But that true child is not Alice. Alice aggressively resists that role—but it is played to the hilt by Carroll—or perhaps projected by Carroll. (Kincaid 196)

キンケイドが主張するように、仮にもしアリスが「子供」でないならば、ウォートンが幼

少期の自身や、マーティンのプロポーズを笑い飛ばしたジュディスを定義するときに使った言葉、little Girl もまた、子供ではないということになるだろう。少なくとも、ウォートン自身は little girl イーディスに「feminine me（女性としての私）」を見出したし、それと同様にマーティンもまた、「little girl」であるジュディスに抗い難い「女性としての私」、つまり異性としての魅力を見出し、そのことが彼自身にペドファイルを自覚させ、結果的に追い詰め、苦しめたのだった。ウォートンの描く「ハンバート」はナボコフのハンバートほどペドフィリアに対して開き直すことはできない。しかしながら、少なくとも、ウォートンはアリスの無邪気な少女像から出発して、アリスを超える少女像を描き出したということは言える。ジュディスをアリス像を超えた被写体として際立たせるために、ウォートンは彼女独自の「ハンバート」となるマーティンを主人公にすえた。そして彼の苦しみがそのまま、ジュディスという「ロリータ」を自身の小説『子供たち』において生み出したといえる。

引用文献

- 〔1〕 Beer, Janet and Avril Horner. *Edith Wharton: Sex, Satire and the Older Woman*. New York: Palgrave Macmillan, 2011.
- 〔2〕 Carroll, Lewis. *Alice in Wonderland*. 1865. New York: W. W. Norton & Company, 2013.
- 〔3〕 Clark, Anne. *The Real Alice*. London: Michael Joseph, 1981.
- 〔4〕 Killoran, Helen. *Edith Wharton: Art and Allusion*. Tuscaloosa: The University of Alabama Press, 1996.
- 〔5〕 Kincaid, James R. *Child-Loving: the Erotic Child and Victorian Culture*. New York: Routledge, 1992.
- 〔6〕 Lee, Hermione. *Edith Wharton*. London: Chatto & Windus, 2007.
- 〔7〕 McDowell, Margaret B. *Edith Wharton, Revised Edition*. Boston: G. K. Hall & Co., 1991.
- 〔8〕 Nabokov, Vladimir. *Lolita*. 1955. *Novels 1955-1962*. New York: Literary Classics of the United States, 1996.
- 〔9〕 Stoffel, Stephanie Lovett. *Lewis Carroll in Wonderland*. New York: H. N. Abrams, 1997.
- 〔10〕 Wharton, Edith. *A Backward Glance*. 1934. New York: Touchstone, 1998.
- 〔11〕 —. *The Children*. 1928. New York: Simon & Schuster, 1997.

【図版の出典】

Edward Harrison May, *Edith Newbold Jones Wharton*, 1870. Painting. Oil on canvas. National Portrait Gallery, Smithsonian Institution, Washington D.C.
John Tenniel, *Alice's Adventures in Wonderland*, 1865-1957. Book-illustration. Wood-engraving, printed on coated glossy paper. British Museum, London.